



Historical / Natural heritage  
in Amagi town



## 奄美初のストライキが起きた？ 松原銅山の盛衰

今から**118年前**、明治37年(1904年)に、亀津出身の**徳三和豊(とく・みわとよ)**が大阪の高橋安兵衛なる人物を招いて**松原鉱業所**、下久志鉱業所の経営、採掘を始めました。徳三和豊は、講道館柔道で名を馳せた、**徳三宝(とく・みたく)**／**とく・さんぼう**の父であり、陸軍にいたころ山師の息子から鉱山を掘り当てて大もうけした話を耳にし、退役後に島の山を巡って2ヶ所の鉱床を発見したのです。鉱夫は当初150人ほどで、3分の1は内地からの渡り鉱夫を呼びよせました。明治37年は折しも、日露戦争が始まる年のこと。もともと品質が低い鉱石だったことや、離島のため輸送の不便などもあり経営は難航したようです。また、当時の島には、内地の物品はあまり流通しておらず、渡り鉱夫らの不便を解消するのに売店を作ったことも、経営を圧迫していました。それでも三和豊は熱心に鉱山へ通っていたようで、その帰りに兼久でマツ(二番目の妻で三宝の母)の法事に参席した際、脳溢血(のういっけつ)で倒れ、その夜のうちに亡くなりました。明治41年(1908年)9月21日でした。実業家の田中省三(たなか・せいぞう)に売却した時期は不明ですが、三和豊の死後だったのでしょうか。鉱山周辺は、鉱石を溶かすために樹木の伐採が進んだことや、採鉱所から出る亜硫酸ガスや鉱毒により、草木は枯れ、川のエビ、カニどころか鳥やハブまで死滅したと言われるほど、荒れた山だったようです。鉱山関係者が行き交うようになった宝土は飲食店が立ち並び賑わいを見せ、精鉱の運搬のために区画整理も進みました。最盛期の**大正10年(1921年)**ごろには、鉱夫は300人ほどが働いていたそうです。戦時の好景気、終戦後の不景気や恐慌のおりを受けるなど、激動の時代に創業、そして廃業を迎えました。ところで、**松原銅山**という名が初めて登場するのは、昭和53年(1978年)発行の天城町誌ですが、その名がどこから来たのか…不明なのです。徳三宝の甥、指宿英造の著書「柔道一代 徳三宝」には、松原鉱山とつづられています。さらに、町誌には閉山から36年と記されており、昭和16年ごろまで、続けられていたのでしょうか？

主な出来事と時代背景



※本来のストライキは雇用主に対し、労働しないことで抗議し、労働条件などの改善を求める争議ですが、松原鉱山では暴力や施設の破壊が伴い、逮捕者も出ました。

## 松原銅山の採掘から精錬の流れ



※ 松原銅山で働いていた渡り鉱夫によって、九州の棒踊りが岡前や西阿木名へ伝えられたのだそうです。

編集：天城町教育委員会 具志堅亮、山田文彦